

文化の違いを知らなかった子供の頃の思い出

島田市川根町遺族会 遠藤良一郎

昭和 22～23 年（1947～1948）小学校二～三年生だったと思う。家の前が砂利道で石がごつごつとして、少し坂になっていた。明石屋（雑貨店）の均君が倉庫から自転車を出してきた（当時は明石屋の家にしか自転車はなかった）。乗り方は三角乗りで「ハンドルとサドルをつないでいる三角形のフレームの中に足を通し反対側のペダルを廻して走る」、ハンドルにぶら下がって明石屋の前から現在のたばこや食堂まで下り、次の人が明石屋の所まで押し上げて行き乗ってくる、ここで交替を繰り返して遊んでいたら、金谷方面から車が砂ぼこりを上げながら来るのが見えたので自転車に乗るのを止め、だんだん近づく車をワクワクしながら目を丸くして見ていると、目の前で止まった。可愛楼に入るのかな？

外国の軍人（進駐軍）が3人降りて可愛楼に入っていった。中でおかみさんと話をしていたが、軍人は軍靴を履いたまま2階に上がっていった（この軍人の内1人が通訳らしい）。土足のまま上がったのでびっくりした。

車（ジープ）の中をおそるおそる覗いたら拳銃とライフル銃がケースに入っていない、むき出し状態でシートの上に置きっぱなし。銃の弾も箱を開けた状態で半分ほど出している。何か異変があった時すぐ撃てる用意をしていたのかと勘繰った？それにしても大事な武器を置いて車から離れている。この油断は「この下川根村は安全と思ったのかな？」

可愛楼の調理人、もんちゃん（本当の名前は知らない）もびっくりして飛び出てきて隣の魚宗さんに入っていったが、治吉さんと出てきて魚宗さんの店の前でジープの方を見ていた。近所の人も大勢集まって珍しそうに、遠巻きにして見ている。

いっぷくが終わったようでドスン、ドスン、靴音がした。降りてきた兵士の一人が入口の所で僕ら子供にチューインガムを配り出したので僕も手を出したらもらえた。食べたものすごく美味しい、うまいのでもう一枚ほしいと手を出したがくれなかった。

一人の兵士がジープに乗ったので見ていると、池の方に行くように曲がったのでジープを追って走った。池の道は昔のままで道幅が狭く、リヤカーより少し広いくらい、ジープではいっぱいの道幅でゆっくり走ったので子供でもついていけた。いけずみさんの所で止まった。

車から降りた兵士は空に飛んでいる小鳥を見て、ライフル銃で撃ち落とした。

凄いなあ、あんな小さなものも命中させることが出来る腕を持っているアメリカの兵隊と日本は戦ったのだから負けるわけだ。

次に狙ったのは、「いっちょもぐり」(カイツブリ)。銃弾は水面をバウンドして「はつもと」貸しボート屋の家に当たりターンと大きな音がした。はつもとのおじいちゃんが「誰だ」と大きな声で叫ぶのが聞こえた。今撃った音と家に当たった音が、同時に聞こえた。それにしてもライフル銃の大きな音と弾の速さには驚いた。

今日は外人を初めて見たことと、自動車(ジープ)、拳銃、ライフル銃、チューインガム、銃の音、弾の速さには、生まれて初めての経験でびっくりする事の連続。戦後になって180度の世の中の急な変化に初めは戸惑ってなじめなかった。

私が中学三年の昭和29年(1954)2月、家業を継ぐため静岡市にある理容美容学校を受験しに静岡へ、駅前から路面電車に乗り、県庁前を通過して次の中町で下車、浅間神社の赤鳥居の商店街「馬場町」を通過して石鳥居のある西草深町の理容美容学校で受験し、終わったのがお昼を少し過ぎたころだったと思う。昼食を食べに呉服町まで歩き、七間町通りと呉服町通りの交差点より少し駅よりの蕎麦屋に入り、ざるそばを注文し、待つ間に、前にある新聞を取って見たらアメリカがビキニ環礁で水爆実験をしたことが載っていた。その近くで焼津の第五福竜丸が漁をしていて水爆実験の灰をかぶってしまった。乗組員全員放射能に汚染され日本に帰ってきた。船長の久保山愛吉さんは死亡、他の乗組員は頭の毛が抜けたり、体の調子が悪く入院、の記事が載っていた。家では新聞もラジオもなく、このような大きなことが起きていたのを知らずにいて恥ずかしい。情報の大切さを知った。いつか余裕ができれば新聞を取りたいと思った。

ちなみに、この年は安倍晋三氏「元内閣総理大臣」が生まれた年、何月に生まれたかは忘れた。

大人になって分かった事、アメリカ映画、特に「西部劇」が好きで小遣いをもたらした時は島田の映画館(文化)にはよく通いました。初めて見た西部劇は『平原児』(ランドルフ・スコット主演)カウボーイハットのよく似合う俳優でカッコよかった。映画の中で日本とアメリカ文化の違いが分かった。アメリカの人は家に入る時にも靴を脱がず履いたまま、食事の時にも椅子に座るので靴を脱がずそのまま、寝る時初めて脱ぐ。可愛楼で靴を脱がなかったことが分かって納得した。

祖母の涙

島田市川根町遺族会 小沢康宏

神や仏の御加護があったなら、祖母は泣かずにすんだかもしれない。盆の休みふとそんな事が頭に浮かんだ。私の家では父の兄弟が4人も戦争の犠牲になった。長兄は中国で、父はマリアナ島で、弟はバシー海峡で、姉は満州で、それぞれ遠い異国の地で戦死したのだ。戦争がいかに怖いものとはいえ、なんで自分の家だけこんなに戦死するのかと祖母が泣いていたのを思い出す。祖母は戦地におもむいた子供達の帰りを一日千秋の思いで待ったに違いない。「論語」の中にも「倚門の望」という言葉があります。戦いに駆り出された息子の帰りを毎日門の所で待ちわびる親の情の事があります。子を思う親の気持ちに心がうたれるが、こんな話はもう沢山、何とも切ない話だ。

川根町では343柱の方が亡くなられているが、その人の数だけ涙がこぼれたと思うと、つくづく戦争というものはやってはいけないものだと思う。

戦後76年の年月が過ぎて、世の中は平和になり、平和になりすぎて天王山にあった招魂社もなくなってしまった。これではいかんと、遺族会の皆さんが立ち上がり、それもどんな言葉や文字で語り継ぐよりも「目に見える形」で後世に残そうと、手造りで立派な慰霊碑を建てた事は良かったと思う。

慰霊碑建立にあたっては、元内閣総理大臣小泉純一郎氏に揮毫をいただき、石は四国の三好石材さんに日本一の庵治石あじいしをお願いする事が出来ました。これはひとえに前会長河野敏郎氏の人脈のおかげです。他人に出来ない事も心と心の結びつきで出来てしまうすごい人でした。今は河野敏郎前会長の御冥福をお祈りすると同時に、川根町343柱の諸霊に対し追悼と慰霊の言葉を申し上げる次第です。

祖母も草葉の陰で満足し、泣いた涙もかわいたことと思う。

戦時中の子供達の情景

島田市川根町遺族会 久保田文雄

先の大戦から77年が経過し、戦争の記憶は風化の一途をたどっております。

戦時中、当時の子供達が学校でどんなことを感じ、どんな生活を送っていたのか、川根町での小学校統合の記念誌、中川根村（現在の本川根町）の徳山国民学校六年生の作文集の中から、いくつか抜粋してご紹介いたします。

[川根町での小学校統合の記念誌]

「やはり桜吹雪の下を…あまりに劇的な時代を背景に」から

入学の年に支那事変、五年生の時に大東亜戦争に突入、昭和20年卒業、そ

の年の8月終戦、遂に神風は吹かなかったのである。

非常時体制—国家総動員—米英撃滅にぬりつぶされた学校時代であった。先生たちとの日々は師弟のそれより親兄弟の感じすらあった。天真らんまんの少年の日々は実に楽しく、ペッタンが200枚、300枚とたまり、カッチン玉がポケットをふくらませ、ゴムケンが渋柿をねらった。A B C D包囲陣は、真綿のように日本を締め付けて来た。くそつと言う気持ちは子供ごろにもじりじりと燃えたものだった。男の先生たちは次々と召集され、満州から又支那からこの子らに便りはひきもきらなかつた。大東亜戦争が始まった。どれほど大きな犠牲があったかも知らずに軍艦マーチに心を躍らしたものであった。三色遊戯、騎馬戦など服のボタンがまともについていたことはなかつた。

男も女も勤労奉仕をやった。薪しょい、炭焼き、それが当然のこととして泣き言はない。授業の中でワラ草履をつくり、そして農場の実習、落葉ひろい、40歳になった今でもありありとよみがえる。

家山小学校が、家山国民学校と改称され、学徒動員令が下り、教科に教練が加わった。校庭に防空壕をつくる作業が始まり、昼夜を問わず避難訓練が行われた。昭和20年3月、在学中に陸海軍少年兵として合格通知をもらい^{まなびや}学舎を校歌に送られて巣立った私達である。同年8月終戦、混乱の時代をのりきり、人の子の親となった今日、自分の少年時代を振り返り、よくぞの感じが湧いて来ると共に恩師や同級生をなつかしく感じるのである。

「思い出の学校生活」から

私達が入学したのは、ちょうど日本が軍国調華やかな時代で、満州や支那へと進出し多数の人材と資力を投入し国威を大いに海外に示している昭和11年でありました。

翌12年7月に支那事変の勃発となり、子供心にも軍服姿が憧れの的であり、青年学校の教練など始業の鐘の鳴るのも忘れて見とれたものでした。当時、尋常高等小学校の名が国民学校と改められたのが確か大東亜戦争の始まった16年と記憶しています。

特殊潜航艇がハワイ真珠湾に集結中のアメリカ主力艦隊に奇襲攻撃を敢行し、大打撃を与えた特攻隊の戦果など、授業前の先生のお話^{まきぎやはん}に胸を躍らせたものでした。高等学校に入った頃は巻脚絆^{まきぎやはん}を巻き、木銃をかついでの軍隊教練が週二時間程度あり、物資不足の折自分でワラ草履^{くわ}を作ってはき、農場に^{くわ}鋤をふり、霜の朝素足で駆け足など忘れられない思い出であります。

[徳山国民学校六年生の作文集]

「あゝ壮烈なる体当たり」

5月29日、私たちはお茶摘みをしていました。9時頃空襲警報が発令されました。でも私たちは茶摘みを続けていると、頭上をあのにくい敵機が編隊をなして何機も何機も東へ通ってゆきました。私たちは近くの柿の木の下に待避しました。敵機はあとから後から、つゞいて来ます。岩崎先生が「こちらの柿の木の下へいらっしゃい。」といわれたので、先生のいらっしゃる少し大きな柿の木の下へ移りました。突然「バリバリ」という音がしました。男子が「体当たりだ早く逃げろ」と叫んだので、みんなはあわてて逃げ出しました。逃げる途中、ちょっと見たら真赤な火が落ちて来るではありませんか。敵機が空中分解したのです。赤い火はクルクル廻りながら私たちの頭上へ落ちてくるようです。また、一目散に逃げました。夢中になってばらの木をかきわけて、やっと草原の中へゆきました。胸がドキドキして脚がぶるぶるふるえます。胸をなでおろしながら敵機を見たら、火は山の向こうへ落ちてゆく所でした。友軍機は、これと反対の山の向こうへ姿を消していました。

あゝ勇ましかったあの勇士……。あゝりっぱな体当たり……。

この見事な体当たりのできる兵隊さんは、日本の兵隊さん一人だけだ。

皇国のためにはすべてを捧げる、自分の身は粉みじんに碎けるとも、皇国護持のために笑って散って行く…………この心、この精神があるから、日本は強いのだ、勝つのだ。彼のハワイ真珠湾で花と散った特攻隊勇士、古野少佐の歌

君のため 何か惜しまん 若櫻

散ってかひある 命なりせば

の意味が、私には、今日のこの体当たりを見てはっきりとわかりました。今は静かになった大空を、いつまでもいつまでも私は眺めていました。あの勇士、あの神に感謝の念を込めながら。

戦時中の様子が窺える三編です。戦争一色のあの時代が手に取るようにわかります。

これからの時代に、このようなことが起こらないようにすることが、今を生きる私たち大人の責任です。

私の戦争体験、後世へ伝えたい思い

島田市川根町遺族会 鈴木彦吉

私は大正7年11月生まれ、現在102歳です。4年前のお盆、二人の娘が九州旅行に誘ってくれました。孫の嫁が早速ツアーに申し込んでくれました。9月には4人で参加、静岡空港から鹿児島へと飛びました。知覧を訪れてみたいという私の思いが叶いました。知覧は陸軍の特攻隊の基地でした。資料館に残る遺品や手紙には、同胞として万感胸に迫るものが有り、一つ一つ読み進む時分には2時間はあっという間でした。身を呈して戦った若者、あるいは若い父親だった人もいます。彼らの思いを忘れてはならない、日本国中の人に見てもらいたい、と強く思いました。

私は昭和14年1月、豊橋歩兵第18聯隊軽機関銃中隊に入隊、3か月の猛特訓の後、射手としての評価を頂き、4月中国は大沽（現在の天津）へ上陸、北京・和順（現在の山西省内）を経て第13大隊第1中隊に編入されました。荒涼不毛の山肌が延々と続く太原（現在の山西省内）の各地を機関銃MGと共に進軍、転戦。郷里では秋祭りかと雪の降る空を眺めた事。夜の歩哨に立つと鼻水も凍る程だった事、前線での応戦の激烈さもさる事ながら旭日の軍旗を先頭に嶮山難路や激流を越しての行軍も筆舌に尽くし難い体験でありました。

その後臨県（現在の山西省内）で戦闘中負傷し新郷（現在の河南省内）の陸軍病院に収容され、回復後太原の本隊を経て18年2月に内地へ帰還、満期除隊を迎えました。帰還の船上、内地の山々が目に入った時、あゝ祖国に帰ることができたのだと、

その心に染み入る日本の緑にただただ感無量でした。

その後結婚、19年長女を授かりましたが、戦況は厳しく20年4月、再び静岡中部第3部隊中隊に応召。本土決戦に備えて静岡陣地構築に勤しむ日々。その後憲兵大隊へ転属、治安維持等に携わるも8月に終戦となりました。

戦いが済んでも、荒廃した祖国を嘆いている暇は無く、母、妻、幼い我が子、我が弟妹達の糊口を凌ぐべく粉骨砕身働く毎日が始まりました。それは全国民皆同じ事でした。

お陰様で自分は、大正、昭和、平成、令和と生き抜いてくることができました。戦争で犠牲となった多くの同胞を思う時、親から貰った丈夫な身体と、幸運に恵まれた事に、ただただ感謝あるのみです。

九州旅行の最後の夜、4人でビールやお酒を酌み交わし存分にカラオケを楽しめた思い出は、平和な日本であればこそその事と、今更のように思いを強く致

しております。

(父は昨年末に脳梗塞で倒れましたが、弟夫婦の迅速な対応と病院の先生方、看護師の皆様方の献身的なご尽力で普通に動けるまでに回復いたしました。しかしながら、記憶、言葉等に少し不自由が残りましたので、今回の文は、父の所有していた記録をもとに、二女が父より聞き取り書きをしたものであります。朝比奈久代代筆)

(令和3年発行の川根町広報誌「戦争が川根に残したもの」より)

兵 役

島田市川根町遺族会 前川吉夫

日本が太平洋戦争で負けた年の昭和20年2月12日、両親兄弟、村中の人達に見送られて、海軍志願兵として17歳の若さで神奈川県三浦半島にあった武山海兵団に入隊した。

今考えてみると教育とは恐ろしいもので、死とか負けるとか思った事も無く、女の人達も国防婦人会として、竹を尖らせた槍で敵に立ち向かう訓練をしていた。自分もそうした時代に育った一人として必ず勝って帰る事を信じ切っていた。

旧下川根から5名家山駅に集まり、森下盛三郎村長の激励の挨拶を受けて、大勢の人達に見送られて出発した。

その時同時に入隊した若者は10,000余名もいた。2月と言えば一番寒い時期で、手袋もなく、早速手は霜やけでふくれ上がってしまった。吹き上げる潮風は、山での温かい土地で育った自分には本当に厳しいものがあった。

海兵団での生活は、毎日が5分前の合図で始まった。寝るにも起きるにもすべてが当番兵が吹いて廻る5分前の合図で終始した。風呂に入るにも上官の持つ指揮棒のもとで行われ、風呂場は兵舎よりかなり離れた所にあったが、寒風の下パンツ一つで隊列を組んで行き、5分程沈んで出る程度だった。兵舎内での勉強も1班15名程だったが、教班毎に評価されて成績が悪いと「飯上げ」と言って、その時は全員食事抜きにされた。3か月の教育の中で一番大変だったのが、毎日行われる吊床訓練^{つりどこ}だった。吊るにも片付けるにも5分の時間内で行う事だった。力のない自分には本当に大変だったが、教育期間の前半で教員室係を命ぜられ、教班長の世話をする事になり、吊床をしたり着替えの面倒、外出時の靴磨きをしたり、みんなが吊床教練で絞られているとき、自分は班長の世話をしていたので、思いがけない楽をした。

3か月の教育期間も終わり、しばらく海兵団に残り外での訓練を受ける。2

か月ほどして6月、寒さも遠のいた頃、突然北海道行きの命令が出て、北海道に向かうことになり、人数などは忘れたがかなりの人数だった。途中上野駅で少し下車を許されて外に出たら、本当にびっくりした。東京が一面焼け野原と化してしまっていた。子供達がホームに集まって来て物乞いをするので、ポケットにあった小銭を与えてやった覚えがある。

青森駅まで汽車に乗り、相変わらず窓は閉じたままなので外を見ることは出来ないままで下車し、青森駅を出て、青森港から大きな貨物船に乗り替え津軽海峡を渡り、函館港に無事に着くことが出来た。

いよいよ北海道での生活の始まりで、一路女満別に向って汽車に乗る。それでも汽車の窓は幕を下ろしたままだった。女満別に着いて女満別湖の近くの畑の中に建てられていた兵舎に到着。即、厳しい生活の始まりだった。なんでそのような所に派遣されたかと言うと、そこに海軍航空隊女満別基地が有って、その守備の為だった。25ミリ機関砲が据えられていてその扱いや打ち方、弾丸込の訓練が始まった。弾倉には直径25ミリの弾丸が20発程入っていて10kg位は有ったと思う。弾倉の脱着訓練で15歳の少年には口には表せないきつい訓練だった。その他には防空壕を掘ったり規律訓練を毎日行った。飛行機はほとんど無かったが、一度特攻機を見送る機会があったが、その兵士は本当の犬死だったと思われる。日本の軍隊の無謀と無知、野蛮な教育の仕方は今では考えられない。口では教えず暴力で教え、階級だけが物を言った教え方だった。たるんでいるとか、娑婆っ気を出しているとか、真剣がないとか何とかかんとか言って、精神棒と言って野球のバットと同じ木の棒で一人一人列の前に出して、思いきり力一杯で尻を2回から3回打ちつけたり、顔を殴ったりしたので、尻に「アザ」ができたり頬が腫れ上がったたりした。

それでも、自分は幸運にも海兵団に居た時、教員室係をした経験からか「従兵」と言って上官の世話をする役付けを命ぜられ、上官の食事などの世話をすることになって、そのような暴力を受けることは少なかった。

何といっても忘れる事の出来ないのは、丁度自分が事務室の当直をしていた時電話が鳴って「今から重大放送があるので全員を集合させるように」との連絡を受けた事である。天皇陛下が国民に敗戦を知らせるラジオ放送だった。この放送を聞いて、中には軍刀を抜いて兵舎の横に切りつける若い尉官もいた。

こうして永い戦争が終わった。

10月まで残務整理に残る事になったが、雪の降る前に家に帰る事が出来た。すでに多くの人^{じな}が帰還していたが、一人淋しく地名の駅に降りた。その時は何の意気も気力もなかったような気がした。

家に着いた時の思い出として、自分が帰るまでとって置いてくれた家の裏にある柿を食べた時の美味しかった味が忘れられない。おそらく最終の兵歴の一人だと思う。

国民だけを犠牲にする戦争は2度と起こしてはならない。平和であってこそ人生があり国が栄えることを次世代に語り、教えを引き継いでいく責任の有ることを、戦争の時代に生きて来た1人として深く感じている。

戦争末期の思い出

島田市川根町遺族会 又平りつ子

第二次世界大戦の終末期になると、こんな山の中の小さな村（家山）でも、生活は戦争のこのことのみが中心になって、悲しい思い出がたくさん残っています。

楽しい一年生入学のはずが、授業中に空襲警報（敵の飛行機B29が近付いてくるから気をつけろ）のサイレンが鳴る日が多くなりました。授業中も、お弁当の時間でも、一年生には素早く帰り支度ができないので、いつも半べそをかきながら、大急ぎで中庭に集合し、待ち構えていた六年生を先頭に、全速力で家に帰りました。

家に着くと、母と一緒に、天王山に登る道の横に掘った防空壕へ入り、真暗がりの中で、大勢の人と息をひそめながら、空襲警報解除のサイレン（B29が遠くに行ったから安心して、普通の生活をしていいよ）をじっと待ったものです。そんな訳で小学校低学年の時は、広い運動場で自由に遊んだという記憶がありません。

ある夜のことで、突然ドーンドーンと家の戸を叩かれて、びっくりして目を覚ましました。母も私も眠りこんでいたので、サイレンが鳴ったことに気づかずに、電気をつけてしまったのです。勿論、電気は黒い布で被ってあったのですが、わずかな光が漏れたのでしょう。あわてて電気を消して、母が真っ暗な中を謝りに外に出ていきました。

父が出征し、母と子だけの生活をしていた中で、この時ほど心細く悲しいと思ったことはありませんでした。

二年生になると、傷痍軍人が学校の講堂に大勢入ってきました。町の病院から避難して来たのだそうです。病気の人、怪我をした人が、みんな白い着物を着ているようでした。

学校からは「講堂に近づいてはいけません。中庭でやかましく遊んではいけない。」と注意され、中庭にあったブランコも、すべり台もシーソーも使わなくなり、出来るだけ校舎の中で静かな遊びをするという、我慢の毎日が多くなり

ました。

そんなある日、当番の仕事で帰りが少し遅れた私が、中庭の校舎側を一人で歩いていた時、講堂の方から白衣の軍人さんが「あんた何年生？」と声をかけてきました。驚いた私は、「二年生!!」と答えるなり、昇降口に飛び入り、そのまま走って家に帰ってきました。

母にその話をすると、「その人はきっと、あんたのことを見て、自分の子供と同じ位だと思って何年生か聞いたんだと思うよ。」と言いました。その言葉に私はハッとし、軍人さんに悪いことをしてしまったと、とても後悔しました。

私の父も、どこかで私と同じ位の子供に会ったなら、私を思い出して声を掛けずにはいられなくなるだろう。そんな父の前から一目散に逃げる子供の姿を、悲しい目で見送る父の姿が想像できました。

その晩は、どうかあの軍人さんの怪我が治って、無事に家に帰り、子供に会えますようにと神様にお祈りして眠りました。

この時代は、食糧も物資もなくなり、みんな苦しい生活に耐えていました。たまに町から製品が入ると、くじ引きで当たった人が買ったようです。そんなある日、母がくじに当たったと、茹で小豆の缶詰を一缶持って来ました。私は、すぐに食べたがりましたが、母は「お父さんが帰って来たら、お汁粉にして食べよう。」と言い、戸棚に大切にしまいました。私もそれには大賛成で、家族三人でお汁粉を食べる日が早く来ることを夢見ていました。

しかし、間もなく父の戦死の知らせが入り、しばらくはお汁粉どころではなくなっていました。

だいぶ経った頃、私が「小豆の缶詰は食べちゃってもいいね。」と言うと、「戦死の知らせが来た後に、生きて帰った人が何人かいるとニュースで言ったから、もう少し待ってみよう。」と言われ、お汁粉の夢はまた引き延ばしになりました。

それから、ずっとずっと待ちましたが、父が帰って来るはずもなく、私も母も缶詰を開ける気力もなく、もうどうでもいいような気分になっている頃になって、やっとお汁粉を食べました。こんなおいしくないものだったのかと思いつつながら食べました。

戦時中の歌ごよみ

島田市川根町遺族会 松島恵美子

【軍艦マーチ】

軽快な軍艦マーチにのって青春時代の思い出の歌の旅の始まりです。皆様方

のおつむ（頭）ケースの中にしまい込まれているあんな事、こんな歌がどのような路線へ繰り広げられて行くのでしょうか、お楽しみに。

でも、その途中語り手の不手際でお聞き苦しい故障の多発が予想されますが、その節はよろしくご判断を。出発は12月8日。

【臨時ニュース】

当時我が国は日独伊、三国同盟が締結されており軍事政権の東条英機内閣の下に、国民は大政翼賛会の組織に組み込まれ、戦争への参加協力を余儀なくされていました。真珠湾の朗報に歓喜興奮の1億総国民。これに呼応するかのよう大東亜決戦の歌が溢れ、戦意は一層盛り上がり参りました。

【大東亜決戦の歌】 2番 征くや激しき皇軍の……大東亜

明けて17年又もや嬉しいニュースです。イギリス東洋艦隊の旗艦プリンスオブウェールズ号の撃沈。シンガポールの陥落。イギリスの最高司令官バージバルをして無条件降伏をせしめました。この戦勝ムードも何時迄もさめやらず、早速英国海軍壊滅の歌が登場してきました。

【英国海軍壊滅の歌】 2番 戦えり戦えり

その後の戦闘においても皇軍の向う所敵なしで僅か一年足らずの中に、赤道直下の島々の大部分を征圧してしまいました。中でも落下傘部隊はセレベス島、スマトラ島の天空に純白の花を咲かせ、降下隊員は現地女性の憧れの的となり、時代の花形、空の神兵として歌われるようになりました。（大東亜共栄圏だとか八紘一宇だとか国のビジョンはこのような形で作られていくのか）。今日も銀翼を連ねて飛び立って行く勇姿

に、日本強しの思いを子供心にも強く焼き付けられました。

【空の神兵】 2番 世紀の華よ 落下傘 落下傘

当時のはやり唄に愛国行進曲がありました。この曲は運動会やいろいろなイベントには必ずといってよい程利用され、演奏されたそうです。「見よ東海の空明けて」に始まる、勇壮な言葉と快適なメロディーは戦意を高揚し、戦果をピーアールするのにぴったりの歌だったのですね。のみならずそのよいリズムは「みよ父さんのハゲ頭」と替え唄まで流行らせました。戦時中の閉塞された暮らしの中、ささやかな癒しを求めた庶民の知恵をものせてしまったのですね。

【愛国行進曲】 2番 正しき平和うち建てん理想は花と咲き薫る

緒戦以来勝利の美酒に酔いしれていたのも束の間、米軍機16機により、東京市民は初空襲の恐怖におののきました。17年4月18日の事です。この時以来各都市にも空襲の波は押し寄せ、国内の軍事色は一段と強化されました。家

庭内の金属回収令、14歳以上女子学生の動員、小学生への軍事教練等々国力増強につとめました。米軍の物量に物いわせた戦力は、17年6月のミッドウェー海戦で日本海軍を惨敗させ、

南方前線の制空権、制海権を完全に奪還してしまっただけです。その後のソロモン沖海戦も我が軍に利あらず、南の島々の日本軍は孤立、いよいよ戦況不利の情勢がひたひたと押し寄せて参りました。

敗戦の色が濃くなるにつれ国内の男性のほとんどが戦場へ狩り出されていきます。銃後の守りは隣組からとその組織は強化され、隣組の歌の台頭で近隣の連携意識が高められました。

【隣組の歌】 5番途中 地震かみなり かじどろぼう

18年の庶民生活は、物資不足に追いつめられ、中でも食料品不足は深刻で、量を増やす為の大根めし、芋めし、それでも三度の食事を戴ける事大へん有難いことでした。(欲しがりません勝つまでは)の標語に戒められ、我慢、忍耐の日々でした。2月ガダルカナル島から日本兵撤退、4月山本五十六司令長官戦死。5月アッツ島玉砕。一年前のあの戦果に輝いたラバウル基地も衰退の一途を辿ります。では往時の勝ち戦を偲んでラバウル航空隊の歌をききましょう。

【ラバウル航空隊】 2番 とどろくその名ラバウル航空隊

19年夏、雨期、インパールはジャングルの中、日本兵の撤退が続いていました。

一生存者の手記

雨に湿った密林は吐き気を催させる臭気が漂っている。風船のようにふくらんだ体、ぶざまに投げ出された手足、極端に曲がった首、腐敗変色した友軍の死体が各所に横たわり恐怖。絶望に呼吸の困難さを覚える。ふと目を下に落とすとぼろぼろの軍服をまと倒れている兵を見た。近寄って体を動かしてみた。反応はなく既に息絶えている。飯ごうの中に筍がゆでてあった。おそらく数分前迄は生きていただろう。筍を食べる力は既になく息途絶えたものと思われる。このさまを見て自分はジーンと胸が熱くなってきた。しかしあすは我が身、この友軍を葬ってやるだけの力はなかった。

死の街道、白骨街道といわれ3万人もの犠牲者を出したインパール撤退作戦。唯一の頼みは空からの加藤隼戦闘隊の不眠不休の援護、出陣も空しいものに終わってしまいました。

【加藤隼戦闘隊】 4番 ああ今はなき 武士の 笑って散った その心

この頃の服装は勿論戦時色一辺倒、防空頭巾、救急袋は常時携帯、ハデな衣

装は非国民扱いにされました。7月サイパン島玉砕、マリアナ沖海戦も無残な大敗戦、本土防衛の砦は総崩れ。そこで政府は空襲の激化を予想し、学童の集団疎開を開始しました。親元を離れ、未知の農山村での暮らしさぞや淋しくつらかった事でしょう。中でも沖縄から鹿児島への疎開船対馬丸の沈没は悲劇中の悲劇。港での親子の別れの涙も乾ききらぬ中、米潜水艦の魚雷に触れ、800人もの学童がまたたく間に太平洋の藻屑と消え去ってしまったのです。こんなつらいニュースを聞き、不自由な暮らしの中で子供達の愛唱歌だったのがお山の杉の子です。

【お山の杉の子】 2番 アッハハの アッハハ 大笑い 大笑い

9月三国同盟の一角イタリアが無条件降伏、10月レイテ沖海戦で殆どの戦艦を失うという決定的敗北。そこで青春を死に賭けた特別攻撃隊が最後の手段として出撃を致します。その火蓋を切ったのが“人間魚雷 回転”です。当時日本男子は14歳になるのを待ちかねて予科練や少年飛行兵を志願し、その身をきびしい訓練に投じたのです。訓練に訓練を重ねやっとな操縦を覚えた暁、必殺必中の特攻兵器で体当りをしたのです。この攻撃は米軍をして“神風”との異名で恐れさせたといわれます。この頃の標語“撃ちてし止まん”を率先遂行されたのです。この様な若鷲を育て特攻精神を培った海軍予科練学校とは、若鷲の歌から訓練内容をさぐる事と致しましょう。

【若鷲の歌】 2番 さっと巣立てば荒海こえて……

次は、紅の血はもえる を用意致しました。

時、19年10月1日、所、東京明治神宮外苑競技場において、雨の中出陣学徒35,000人の壮行会が行われました。ペンを捨て書物を捨てたその両腕に、銃を握り操縦桿を握って南の島へ突進して行きました。そば降る雨の中、親族同窓生などで場内は埋め尽くされたとか。目の中に浮かんでくるような光景と共に私は彼らをうたった次の様な詩がうかんで来ました。さだかではありませんが、聞いてください。

云う勿れ君よ別れを、世の常を又人の生き死にを、南海の遥けき果に、今やはや何をか云わん、熱き血を捧ぐる者の大なる胸をたたけよ。君は行くバタビアの町、我はよくバンドンを突く、この夕相さかるとも輝かし南十字をいつの世か共に見ん、云う勿れ君よ別れを世の常を又人の行き死を

【紅の血燃ゆる】 2番 いさみたちたる強者ぞ……燃ゆる

12月7日東海地方に、あけて1月13日三河地方に、大地震がありました。双方共に被害甚大だったのですが、統制下故詳しい情報は伝えられませんでし

た。当時の人々は地震を空襲だと思い、防空壕に飛び込んだとか、竹藪は避難の人で一杯だったとか、笑えない事々が語り草になっています。3月10日またまた東京は最大悲劇の舞台になってしまいました。B29 334機が2時間半にわたり大爆撃を敢行したのです。隅から隅まで焼き尽くすというじゅうたん攻撃で、首都東京は一瞬にして火の海と化し、巷は阿鼻叫喚12万人もの死者を出してしまったのです。

続いて4月に遂に米軍沖縄上陸、戦況は悪化の一途を辿りますが、なお勝利の日を信じて、若鷲は知覧基地から沖縄へ発進その434機は再び帰ることはありませんでした。でも国民は勝利の日を信じていました、いつかきっと神風が吹くだろうと。

【勝利の日迄】 湧いて来る 来る 撃ちて止まん… 勝利の日迄 勝利の日迄

いよいよ終りに近づいて参りました。物語の最後が特攻勇士が出撃前に交わした歌、誓った歌、同期の桜です。二人の名優によって演じられるエンドラン、ラストシーン

の感動をじっくり味わって戴きたいと思います。

【同期の桜】 1番、2番、ナレーション セリふ 3番 同じ特攻の庭に咲く
6日広島市原子爆弾投下、7日豊川海軍工廠爆撃 8日ソ連軍我が国に宣戦布告、9日長崎市原子爆弾投下

遂に神風は吹きませんでした。そして迎えた8月15日

【終戦の詔勅】 開始と同時、海ゆかば

これは万葉集防人の歌の中の一首

大君のへにこそ死なめ

の忠誠心は遠い昔から日本人の心の奥そこに脈打っていたのです。今でこそこの道徳観は変わって参りましたが、生き長らえた私達は、戦争の犠牲者の鎮魂と戦争忌避への序曲として受け止めたいと思います。

【終了】 思い出の旅 終着駅に着きました。

戦争と母と私

島田市川根町遺族会 守谷庄平

大正8年3月31日に母は生まれ、両親と兄姉5人で暮らしていましたが、父親が亡くなり、五和の親戚の志田さんにお世話になっていました。その志田さんが米屋と木炭の商売の関係で家山の八木さんと話を進め、母を子供がいなくて困っていた守谷家の養女として育てることになり、母も生活が変わり淋し

かったと思います。守屋家の両親が大事に育ててくれたお陰で母も成人となり、昭和16年5月に縁あって結婚しました。

結婚生活も72日で、父は7月15日三島の部隊に入り満州で18年3月まで務めました。私は、この間の17年3月17日に生まれましたが、父は今度は西ニューギニアハルマレラ島に渡り、昭和19年9月21日戦死しました。

それから3年後には祖父が亡くなり、祖母と母と私の3人で暮らすこととなり、男の働く人がいなくなり、母は2年お茶もみをしたのですが身体を壊してしまい、それからはお茶師さんにお世話になっていました。10年後、私が中学を卒業と同時に就農することになり、母を助け一人前の農家になりたいと一生懸命頑張ってきました。

戦争がなかったらこんな苦労はしなくても良かったと思う日々でした。母は、毎晩のように夜なべをしていました。麦ごはん、みそ汁、梅干し、たくあん漬、粗末な食事でした。

私が成人となり、妻を迎え、それからは母も楽になり、自分の時間ができ、塩本と家山の人達とゲートボールの練習に通う毎日でした。

84歳の時右側の腰の骨を骨折、楽しみにしていたゲートボールもできなくなり、手押し車で整骨院と商店に行くのが楽しみでしたが、94歳の時今度は左側の腰の骨を骨折、今度は車いす生活となり、島田のアポロンさんに5年間、それから大和田のとは特養ホームにお世話になっていましたが、令和2年5月に101歳で亡くなりました。大正から令和まで生き延びたのもホームのお陰だと思っております。

「大陸の空 南方の空」より抜粋 島田市川根町遺族会 諸田平八

「一空の悲話」

同じ比島方面の攻撃に当たる高雄空、鹿屋空、一空の陸攻隊は、開戦から順調な作戦行動を続けていたが、12月12日台南基地を発進した一空の九六陸攻36機は比島イバ飛行場を攻撃目標に、指揮官宮松少佐(この人は支那事変当時、南昌飛行場へ強行着陸し敵機を焼き払って帰還した豪傑)は、当日の目標付近の天候が悪く2隊に分け、福岡大尉の指揮する18機は雲の下400mで敵飛行場の爆撃に移った。

飛行場に進入するにつれ、高射砲、機銃陣地から猛烈な射撃を受け、爆撃の終わった時には多数機が被弾し、2小隊3番機の同僚である首藤機は左エンジンから火を吹き、編隊から離れ遂に西海岸の砂地に不時着した。

「不時着しても決して死ぬな、必ず助けに行く何処かに隠れている」

8名は参謀長の口達通り行動した。

基地に帰還した指揮官から不時着機は自爆と判断され、搭乗員は同日付けで戦死と報告されたが、しかし彼らは生きており、燃え盛る不時着機から脱出した8名は直ぐ原住民に捕らえられ近くの米軍キャンプに連行された。そのキャンプには二世らしい日本語の上手な米軍人がいて、其の通訳から尋問を受けた後、高い鉄柵のある建物へ収容されたが、数日後に陸軍部隊に救出され、艦隊司令部を経て台南の基地へ帰ってきたが、この時から彼等に思わざる悲劇が始まる。

艦隊司令部に呼ばれた際の詳細な報告で、例え短時間でも敵の捕虜となった事が明白になった為、原隊に帰った喜びも束の間で、8名は別棟に隔離され、特技章も階級章も剥奪され、罪人としての待遇しか与えられなかった。

最善を尽くし、命令通り行動し戦って生還した搭乗員に対する適切な処置なのか、開戦前の参謀長の口達通り行動した結果が軍規に触れるのか、快活だった彼等も一変し殆ど物を言わぬ人間になってしまった。一空の幹部として、首藤機のペア以上に天候不良から低空飛行で爆撃針路に入った自分の責任をどう処理するのか、福岡分隊長の苦悩はいたたまれないものであったと思う。2月20日チモール島クーパーンに落下傘部隊の降下作戦が実施され、其の協力に九六陸攻2個中隊17機が参加する事になった。一空攻撃隊に首藤機のペアも一切を復活させ死場所を得るべく敵弾の命中を待っていたものの、オランダ領は米軍の様な対空砲火も弱く、止む無く福岡中隊長は各機一列縦隊になって射撃を行い、それが終わって無事上昇したところで列機を纏め帰投を命じ自機のみ反転し、急降下で敵陣地へ突入自爆を遂げ自らの責任の最後としたものと思われる。3ヶ月の間を囚人同様の生活を送って来た彼等に、最後の死場所を与える目的でポートモレスビー攻撃のため、ラバウルからラエに移駐させられ、3月30日零戦3機に守られ単機写真撮影に出発させられ、敵基地上空に零戦3機を残し、1機で猛烈な対空弾幕の中で悠々旋回し、連続写真を撮った。

ところがこの日は何故か敵戦闘機は一機も出現せず、入念に飛行場や港湾を偵察して、又も無事に帰り撮影フィルムは直ぐ現像され、その後の爆撃に大いに役立ったのであるが、翌3月31日遂に司令より「自爆せよ」との暗黙の命令が出たのである。

敵は反撃すべくポートモレスビーに多数の戦闘機群を集結させており、其のさなか戦闘機の護衛も無く、首藤機は単機爆弾を搭載して出撃させられたので

ある。

「我今より自爆せんとす、付近の天候晴れ、生前のご好意に深謝す、天皇陛下万歳」

これが首藤機 8 名の最後であった。

モレスビーへ飛ぶことが危険と考えるより、毎日苦悩の明け暮れから一刻も早く離脱したい心境で、久々の笑顔を見せた 8 名は喜んで愛機に搭乗、決別の爆音を残して其の俣帰らなかったのである。

「同期の絆」

岐阜県出身の彼と知り合ったのは通信学校に入隊した時からで、頼もしい体躯で同じ分隊の隣り合わせの教班でもあり、温厚で気の合う仲間だった。通信学校から横須賀航空隊へと、烈しい練習生過程を卒業し、それぞれ実施部隊へ転属となった。支那事変以来、大型機搭乗配置のため作戦行動も同一方面だったので、不時着した首藤達 8 名の情報もすぐ判った。生還してほんたによかったと高雄空のペア達も喜び合ったが、日が経つにつれ吃驚するニュースが耳に入った。みんな同情はしても誰も絶対に逆らえない軍律の「捕虜」と呼ぶ言葉に拘り過ぎた憶測から、噂話も飛躍して軍法会議へ回され、内地へ送られたなどと尤もらしく伝わって来た。もし自分が首藤機だったら、どうしただろう。精神的な苦悩と海軍入籍以来期待されている実家の両親や親族の悲嘆を思うと、全く動転するばかりだった。戦後程なく経ってから「首藤達の名誉回復運動を起こそう」と言う話も出たが、各地に点在する同期関係者の連絡も円滑を欠き、終戦から歳月を経て両親達の存在も不明で、世代も代わり忘れかけていた古傷を痛ませる結果も危惧し立ち消えとなった。

幸いにも厚生省の記録には順調な叙勲が行われていた模様で、せめてもの供養になった事かと心からご冥福を祈っている。戦争とは総てが残酷非道の四文字に言い尽くされる。繰り返してならないものは戦争である。